

## ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性

佐藤 成明・長谷川 悦示\*・市村 操一

### Aggression in sport competition of rugby and Kendo (Japanese fencing) player

Nariaki SATOH, Etsushi HASEGAWA\* and Soichi ICHIMURA

The purpose of the present study was to find out and compare the factorial structures of aggression in sport competition of rugby and Kendo (Japanese fencing) player, and to examine the relationships between these factors and their aggression in usual life.

In study 1, a questionnaire consisted of forty items to measure aggression in sport competition of rugby player was constructed as the result of a pilot study. Subjects were 145 high school and 220 university rugby players. Six of seven factors extracted by the factor analysis to the questionnaire could be interpreted as follows ; (1)retaliatory behavior related to anger, (2) aggressive play style, (3) fear of contact play, (4)approval of rule violating behavior,(5)concern about the opponent's injury, (6)intentional foul play.

In study 2, a twenty-eight items questionnaire to measure aggression in sport competition of Kendo player was prepared. Subjects were 309 male and 260 female university kendo players. Five factors were extracted by the factor analysis to the questionnaire. These factors were interpreted as follows ; (1)aggressive play style, (2)approval of rule violating behavior,(3)fear of contact play, (4)retaliatory behavior related to anger, (5)avoidance of quarreling.

In study 3, Saarbrücken aggression scale (SAS) to measure aggression in usually life were administered to subjects participated in study 1 and 2. Five factors were extracted by the factor analysis to SAS. These factors were interpreted as follows ; (1)aggression inhibition, (2) aggression related to self-esteem, (3)aggression intention, (4)self-assertion, (5)anger expression. The results of multiple regression analyses showed that SAS factors accounted for retaliatory behavior related to anger in each sport (25-19%) more than for other factors of aggression in sport competition, and suggests that there are many other factors that affect aggression in sport competition.

Key words : Aggression in sport competition, Factor analysis, Rugby, Kendo (Japanese fencing)

#### はじめに

スポーツ領域, とりわけ激しい接触プレイの許されている競技では, 選手や観衆による攻撃行動が西欧・北米を中心に大きな社会的問題にまで

なっている。この問題については, 人間の攻撃性に関わる大きな2つの立場, つまり攻撃性の本能理論と学習理論から論じられてきた。

本能理論を主張するFreudらの精神分析家やLorenzらの比較行動学者たちは, 暴力的なスポーツに参加したり観戦したりするひとは, 人間の内

\*筑波大学大学院体育科学研究科

在的な攻撃性を低減あるいは解消させるというカタルシス説を唱えた。しかし、スポーツ競技場面における攻撃研究の結果は、この仮説を必ずしも支持するものではなく、しばしば選手や観衆の攻撃行動の増加を示すものがあつた (Russell, 1983)<sup>(10)</sup>。また本能理論から出発した欲求不満—攻撃説が様々な角度から批判された。とりわけこの説が欲求不満と攻撃反応を一義的に結び付けて、状況中の外的要因や個人の認知的要因、さらには個人の学習経験を考慮しなかつた点に集中した (Berkowitz, 1965)<sup>(5)</sup>。この状況要因や個人の学習経験に重点を置くのが学習理論の見解である (Bandura, 1973)<sup>(1)</sup>。

この立場にあるスポーツ競技場面における攻撃行動の研究は、選手間の攻撃行動を促進する要因として次のようなものを指摘している。生理的興奮を喚起する激しい身体運動、欲求不満のもたらす相手 (チーム) との得点差や試合の勝敗などの状況的要因 (Lefebvre *et al.*, 1980)<sup>(9)</sup>、選手の所属集団に存在する非公式の攻撃的規範 (Silva, 1981)<sup>(12)</sup>、さらに選手個人の攻撃行動を抑制する道徳心の低さ (Bredemeier, 1985 a ; Ryan *et al.*, 1990)<sup>(3,11)</sup> など。そして、これら諸要因の作用により、選手の攻撃衝動が増大、または罪悪感や良心からの内的な抑制が解禁あるいは低減して、攻撃行動が誘発される。さらに、攻撃行動は正当化され、時には奨励され、そして学習されると論じている (Silva, 1984)<sup>(14)</sup>。

こうしたスポーツ状況における個人の攻撃傾向の増大とそれを抑制する力の低減という問題に関連するものとして Kornadt の動機理論がある (Kornadt, 1984 a ; 1984 b)<sup>(7,8)</sup>。彼の攻撃動機理論の主な特徴を述べると、(1) 攻撃性は単純な特性としてではなく、2つの動機の要素を含んだ複雑な体系として扱われる。ひとつは攻撃行動への接近要素である攻撃動機 (aggression motive) で、これは第一に意図された目標、すなわち誰かを傷つけること、人の資産の暴力的略奪、によって定義される。もうひとつは攻撃行動への回避要素である攻撃抑制 (aggression inhibition) で、これは攻撃を回避しようとする目標によって定義され、攻撃の結果から起こる報復の恐れや、攻撃の実行にいたるまでの道徳的体系からおこる罪悪感と関わる。(2) この動機体系はそれ自体で攻撃行動を誘発するのではなく、状況的条件との相互作用

においてのみ有効となる。(3) この動機体系は本能的、生理学的な基礎を有するが個人の学習経験により発達する。(4) この動機体系には個人の学習経験の違いによる個人差が生じてくる。

この理論に基づけば、競技場面に存在する様々な状況的条件との相互作用により、選手個人の動機体系の中にスポーツ競技場面に特有な目標をもつ攻撃動機および攻撃抑制が形成され、組み込まれると考えることができる。そして、こうした選手個人の攻撃性の程度を多面的に測定することができるならば、それは選手のパーソナリティ理解や、競技場面における攻撃の実態把握、これらの攻撃性の発達に影響する要因の追及など、スポーツ競技場面における攻撃に関する研究を促進するために役立つものと考えられる。そこで本論文ではスポーツ競技場面における選手個人の攻撃性を測定する尺度を構成し、その因子構造を明確にすることを目的として、以下の3つの研究を行った。

まず研究1では、身体接触プレイをルールの上で認めている集団競技であるラグビーの選手を対象として、競技場面における攻撃性を測定するための質問紙を作成し、それにより測定される攻撃性の因子構造を明確にする。ついで研究2では、ラグビー以外の身体接触プレイを含む競技においても研究1で明らかにされた攻撃性の因子がみいだされるかを検討する。研究対象とした競技は竹刀を介しての身体接触をルールで定めた剣道である。さらに研究3では、研究1と研究2でそれぞれ示されたラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性と、彼らの日常一般での攻撃性との関連性を検討し、競技場面における攻撃性の特徴を明らかにする。

## 研究1

### 方法

#### 質問項目の作成と予備調査

質問項目については、まずはじめにスポーツ領域での攻撃に関する研究文献や筑波大学ラグビー部のコーチ、選手へのインタビューから、ラグビーにおける攻撃性を反映し、競技中よく観察される意見や態度、行動を既述した65項目を作成した。作成した質問項目の妥当性を検討するため、岐阜県吉城郡古川町数河高原において夏期合宿中であつた三重県下の5つの高校のラグビー部員146名と同地で開催される全国教員大会に出場する7

都府県の教員ラグビーチームの選手133名を対象として予備調査を実施した。調査はそれぞれの質問項目について「まったくあたってない」から「まったくあてはまる」までの6段階評定尺度上に評定するものであった。調査は昭和61年8月21～24日の期間に、チームごとに集団で行った。回答に不備のあった高校選手で5名、教員選手で4名については、信頼性を欠くものと判断して除外し、270名について分析を行った。

65質問項目について次の基準により質問項目の弁別性、妥当性の評価を行った。(1)回答の分布の偏りの著しい項目、(2)他の項目との相関やテスト得点との相関が低い項目、(3)教員選手の評価から内容的に妥当でないと言われた項目、(4)高校選手の回答時によく質疑の出た項目については、十分に内容を考慮した上で以後の分析から除外する。その結果19項目を不適当と判断した。残りの46項目について、項目間の相関行列を算出し、そこから主因子解を求めた。因子数を8としてバリマックス回転を行った(累積寄与率は50.4%)。因子数は因子の解釈のしやすさから決定した。因子の解釈は動機論の立場から、原則として回転後の因子負荷量が0.4以上で他の因子との負荷量が低い項目を取りあげ、それらの内容を中心に行った。その結果、攻撃促進的な因子として「衝動的・報復的攻撃」、「攻撃的信条・規範」、「意図的な不当プレー」、「攻撃的自己評価」が、また攻撃抑制的な因子として「公正な競技態度」、「相手への危害の配慮」、「抗争の回避・抑止」、「接触プレーに対する恐怖」が示された。

最終的に各因子の解釈の際に参考にした質問項目を中心にそれぞれ5項目を選定し、それらに対して若干の字句の修正を施して、Table 1に示す40項目からなる質問紙を作成した。回答方法はそれぞれの質問項目について「まったくあたってない」から「まったくあてはまる」までの6段階評定尺度上に評定するものとした。

#### 本調査の実施

被験者は、昭和61年度全国大会に出場した茨城、岐阜、山梨県の高校代表チームの部員149名と、関東大学対抗戦の2チームおよび関東大学リーグ戦の1チームに所属する部員236名であった。そのうち、回答に不備があった高校選手で4名、大学選手で1名は分析から除外した。また、大学選手のうち高校時にラグビー競技の経験をまったく

有しない14名についても分析から除外した。したがって、高校145名、大学221名の計366名を分析の対象とした。高校選手の平均競技経験年数は3.1年、大学選手では6.1年であった。調査の実施方法は、チームごとに学校の教室等で集団で実施した。また、調査は昭和61年10月から11月にかけて行った。

#### 結果と考察

##### 1) ラグビーにおける攻撃性の因子構造

質問項目間の相関行列を算出して、その行列から主因子解を求めた。因子数を7としてバリマックス回転を行った時に最も明確な因子構造が生じた。Table 1は回転後の因子負荷行列を示す。これらの7因子の全分散に対する累積寄与率は、46.5%であった。因子の解釈には回転後の各因子への負荷量が0.4以上で、他の因子との負荷量が低い項目をそれぞれの因子を代表する項目として採用した。なお因子Ⅶについては、項目内容の共通性が乏しく、解釈できなかった。因子Ⅰから因子Ⅵについては以下のように解釈した。

因子Ⅰの項目には、自分に向けて仕掛けられた相手選手による不当なプレイに対して怒りや敵意を感じ、その相手に対して抗議あるいは暴力によって報復すること、その対極の攻撃の衝動を抑えて相手との抗争をできるだけ回避することを内容に含むものであった。そこでこの因子を「怒りに伴う報復行動」として命名した。この因子を代表する項目は、35, 7, 31, 5, 27, 39, 15で、そのうち7, 31, 5, 39, 15が反転項目である。Bredemeier (1983)<sup>(3)</sup>はスポーツ競技場面における攻撃をその行動の第一の強化子により、それが被害者への危害行動自体であるような反動的攻撃(reactive aggression)と、それがその危害行動ではなく別の目標、たとえばチームの勝利のための一つの手段としての道具的攻撃(instrumental aggression)の2つに分類した。この因子は前者を表すものと思われる。

因子Ⅱの項目の内容は、自分のプレイのスタイルがどれほどラフで、攻撃的であるか、周囲の他者にどれほど脅威を与えているかについての自己認知と関わっていた。そこで、この因子を「攻撃的なプレイスタイル」と名づけた。この因子を代表する項目は、33, 25, 1, 17, 9である。Bredemeier (1985 b)<sup>(4)</sup>やSmith (1978)<sup>(12)</sup>は攻撃

Table 1 ラグビーにおける攻撃性質問紙の因子構造

No.	質問項目	因子	I	II	III	IV	V	VI	VII	h <sup>2</sup>
35.	相手が不正なプレイをしてきたら、私はすぐにかっとなって、手が出そうになる。		<u>-.67</u>	.12	.01	-.06	.08	.12	.13	.51
7.	試合中、私は、相手のトラブルはどんなことがあっても避けるようしている。		<u>-.63</u>	.03	.14	.13	.34	.06	.07	.56
31.	試合中、たとえ自分の方が正しいと思っても、相手とやり合うようなことはしない。		<u>-.61</u>	-.12	.13	.14	.21	.01	-.02	.47
5.	興奮して相手といがみ合っても、私はすぐに冷静さを取り戻す。		<u>-.59</u>	-.07	-.15	-.00	-.02	-.08	-.04	.38
27.	笛が鳴って即座に、私に対するプレイをやめない選手に、私はどなりつけ払いのけたりする。		<u>-.51</u>	.06	-.04	-.01	.08	.31	.12	.38
23.	試合中、けんかになるよりも私は他の人の言うことをおとなしく聞く。		<u>.48</u>	.01	.17	.08	<u>.42</u>	-.15	.01	.46
39.	試合中、相手に下手なことを言っ、怒らせるようなことはしない。		<u>.43</u>	-.03	.00	.11	.07	-.15	.22	.27
19.	味方の選手が相手の選手のプレイで、こっぴどくやられるのを見ると、私はその選手のかたきを取ってやりたくなる。		<u>-.42</u>	.22	-.07	.06	-.02	.15	<u>.42</u>	.43
15.	腹が立ってもそれを抑えることのできないような選手は、スポーツマンとして適格でない。		<u>.40</u>	.05	-.01	.34	.07	.06	.13	.30
33.	私の強烈なコンタクト・プレイは、味方の選手も恐れるほどである。		-.12	<u>.71</u>	-.25	-.11	.05	.14	-.16	.64
25.	私は激しい当たりやタックルをして、相手選手を脅かす。		-.08	<u>.69</u>	-.31	.08	-.04	.28	-.08	.67
1.	まわりの人は私に、荒っぽいプレイを期待している。		-.06	<u>.69</u>	.13	-.12	-.08	-.07	.03	.52
17.	私は、普段はおとなしいが、競技場では人が変わったように激しいプレイをする。		-.04	<u>.57</u>	-.13	.02	.07	.16	.12	.39
9.	私は、試合中の自分を向こう見ずな男だと思う。		-.27	<u>.44</u>	.16	-.03	.27	.11	.24	.44
2.	争いはラグビーには付きものである。		-.38	<u>.39</u>	.23	-.03	-.26	-.11	.18	.46
3.	試合中、私は憎らしい相手選手を打ちのめしたくなる。		-.28	<u>.34</u>	.29	-.04	-.32	.20	.29	.51
40.	相手の選手から強烈なタックルやあたりをくらうと、それ以後その選手をなるべく避けたい。		.08	-.04	<u>.73</u>	-.12	.10	-.05	-.07	.57
24.	私は自分より大きく強そうな相手の選手が突進してくると、つい弱気になってしまう。		.01	-.13	<u>.71</u>	.03	.03	-.25	-.06	.59
16.	私は相手からの強烈なタックルを受けるのが恐ろしい。		-.01	-.04	<u>.70</u>	-.03	.17	.07	.16	.55
32.	私は空中に上がったボールをキャッチするとき、相手の強烈なタックルが気になってしりごみしてしまうときがある。		-.01	-.07	<u>.65</u>	.02	.05	.06	-.16	.46
8.	私は相手が大きくて強そうなどきほど、その相手と真っ向から勝負したくなる。		.04	<u>.40</u>	-.50	.03	.16	.15	.23	.51
21.	私は相手のプレイがどうであろうと、公正なプレイによって戦うことが大切だと思う。		.33	.11	.02	<u>.69</u>	-.01	.09	-.08	.61
18.	レフリースが反則を取らなければ、どんなラフなプレイをしても良い。		-.20	.04	.12	<u>-.61</u>	.19	-.13	.28	.56
10.	不正なプレイでもときとして勝つために、それは必要なことである。		-.13	.23	.05	<u>-.61</u>	-.11	.09	.09	.47
37.	相手に怪我させることを意図する選手に対して、厳しく反則を取るべきである。		-.08	-.08	.00	<u>-.56</u>	.13	-.12	.06	.36
29.	試合中、私は相手選手に汚い反則を犯した時、非常に悪いことをしたと思う。		.07	.16	-.04	<u>-.56</u>	.29	-.12	.14	.46
30.	勝つためとはいえ、相手をひどく怪我させるプレイはすべきではない。		-.07	.01	.14	<u>.40</u>	.36	-.24	-.19	.41
14.	味方の選手だけでなく、相手の選手が倒れていると心配で仕方がない。		.08	.12	.03	<u>.16</u>	<u>.67</u>	-.08	.09	.51
38.	試合中、できるだけ私は相手に必要以上のダメージを与えないようにしている。		.11	-.19	.13	.00	<u>.61</u>	-.06	-.20	.48
6.	選手達は、たいていお互いに傷つけないと願っている。		.15	.10	.17	.24	<u>.43</u>	.18	-.18	.38
22.	相手の選手が私に腹を立てていたら、私は自分の側に間違いはなかったか反省してみる。		.26	.29	.31	.24	<u>.34</u>	-.07	-.01	.43
36.	相手がボールを受け取る少し前と判っていても、ときどき私は激しいタックルを仕掛ける。		-.21	.03	-.20	-.05	.10	<u>.65</u>	-.05	.52
12.	空中に上がっているボールを取ろうとする相手選手に対して、私は強烈なタックルを狙う。		-.17	.04	-.02	.04	.01	<u>.56</u>	.15	.37
20.	ボールを持ったままで、身動きのできない状態にいる相手選手に、私はここぞとばかりに猛烈なタックルを仕掛ける。		-.03	.17	-.14	-.05	-.08	<u>.52</u>	.26	.40
4.	私は相手がボールをプレイした直後でも、わざと激しいタックルを仕掛けるときがある。		-.15	.22	.14	-.26	-.23	<u>.51</u>	.06	.47
28.	相手選手が怪我をしていたら、私はその箇所を狙う。		.05	.21	.16	-.29	-.26	<u>.48</u>	.06	.46
26.	相手を尊重し過ぎると試合に勝てない。		-.07	.04	-.06	-.18	-.09	.05	<u>.59</u>	.40
11.	私は相手にやられたら、それ以上にやり返さないと気が済まない。		-.40	.23	.07	-.15	-.14	.21	<u>.49</u>	.54
34.	試合中、相手の選手に対して、情けなど無用である。		.06	-.05	-.05	-.02	-.27	.26	<u>.49</u>	.39
13.	私のプレイに対するコーチやチームメイトからの批判を、私は快く受入れる。		.20	-.05	-.12	.15	.18	.04	<u>.41</u>	.28
		寄与率	8.8	7.4	7.4	6.5	5.9	5.6	4.9	46.5

的なボクシングやアイスホッケーの選手へのインタビューから、彼らには彼らの危険なラフプレイの形容として「殺し屋」、「壊し屋」といったあだ名が付けられていることを報告した。したがって、このような自己認知を強く抱く選手は、そうでない選手に比べてより攻撃的であると想定することができる。

因子Ⅲの項目には、相手選手との接触プレイをできるだけ避けようとする反応が含まれていた。そこで、この因子を「接触プレイに対する恐怖」因子と名づけた。この因子を代表する項目は、40, 24, 16, 32である。

因子Ⅳの項目には、勝つためには不正な行為もやむをえないとする攻撃的な意見や信条と、その

対極である競技中はいかなる場合であっても常にルールに則って競い合うことが重要であると考え、態度が含まれていた。そこでこの因子を「ルール違反の許容」と命名した。因子を代表する項目は、21, 18, 10, 37, 29, 30で、そのうち21, 37, 29, 30が反転項目である。この因子の得点が高いほど、ルール違反に対しての許容度が増すと考える。この因子はSilva (1983)<sup>(13)</sup>のいうルール違反行動について知覚される正当性(perceived legitimacy of rule violating behavior)の概念や、それに関連するSmith (1978)<sup>(15)</sup>やSilva (1981)<sup>(12)</sup>らのいうスポーツ集団の非公式な攻撃的規範を反映しているものと考えられる。また、Bredemeier (1983)<sup>(2)</sup>の分類したもう一つの攻撃のタイプである、道具的攻撃の要素を含んでいる。

因子Vの項目は、相手に危害を加えることに対する気遣いや、それを犯した時の自己の責任の意識を反映するものであった。そこでこの因子を「相手の危害に対する配慮」と命名した。この因子を代表する項目は、14, 38, 6である。日常においては他者に対して危害を加えるような行動を起こしたならば、その加害者には当然それに対する責任が課せられる。競技中においても競技の特性上最低限の危害の程度はやむをえないとしても、進んで相手に怪我をさせることには日常と同様にかなりの内的な抑止が働くと思われる。

因子VIの項目は、ラグビーの競技ルールに違反し、しかも相手に重大なダメージを与える危険性の高いプレイを意図的に実行するというものであった。そこでこの因子を「意図的な不当プレイ」因子と名づけた。この因子を代表する項目は、36, 12, 20, 4である。これらの行動が道具的攻撃であるか反動的攻撃であるかは動機についての叙述が項目に含まれていないため特定できない。しかし、ラグビー選手のインタビューからは、これらのプレイが相手チームの展開プレイやサポートプレイを阻止し、その後のゲーム展開を味方チームに有利に導こうとするための常套手段であるという報告をしばしば得た。したがって、この因子はラグビー特有の道具的攻撃を表すものではないかと考えられる。

2) ラグビーにおける攻撃性得点の高校と大学被験者間の比較

因子ごとに代表する項目の評定値を単純加算し

たものを、各因子の得点とした。Table 2は高校および大学選手のラグビーにおける各攻撃性得点の平均値を示す。

両者の平均値を比較した結果、高校の選手が大学の選手より統計的に有意に高い値を示したのは、「相手の危害への配慮」と「接触プレイに対する恐怖」であった。攻撃行動の発現を抑制する機能を有すると仮定されたこれらの因子は、被験者の競技経験が長くなり、あるいは競技水準が上がるにつれて低下していくのかもしれない。反対に「怒りに伴う報復行動」、「意図的な不当プレイ」については、大学の選手が高校の選手より高い数値を示した。これらの因子の表す攻撃行動は、被験者の競技経験が長くなり、あるいは競技水準が上がるにつれて、遂行されやすくなる、あるいは学習されていくのかもしれない。また高校と大学で差の見られなかった因子は、「ルール違反の許容」と「攻撃的なプレイスタイル」であった。

## 研究2

### 方法

#### 質問紙の作成

質問項目については、研究1で作成されたラグビーにおける攻撃性の質問紙の40項目のうち、剣道であてはまらない項目については削除し、そのままあてはまる項目についてはそのまま採用した。また、剣道の競技場面を想定した新たな項目を付け加えた。こうして、Table 3に示す剣道の競技中よく観察される行動や態度、意見を記述した28項目を作成した。回答方法は研究1と同様に、それぞれの質問項目について「まったくあてはまらない」から「まったくあてはまる」までの6段階評定尺度上に評定するものとした。

#### 調査の実施

質問紙テストは、全国の大学生剣道部員(男子、女子)を対象に実施した。男子については昭和63年10月に開催された第36回全日本学生剣道優勝大会に出場した56大学のうち、36大学の選手296名と、筑波大学剣道部員39名の計335名について実施した。女子については、15大学の剣道部員265名について実施した。そのうち回答に不備のあった男子で25名、女子で5名は除外して、男子309名、女子260名の計569名を分析の対象とした。調査の実施方法は、各部ごとに学校の教室等で集団で実施した。また、調査は昭和63年10月から11月にか

Table 2 高校および大学ラグビー選手のラグビーにおける攻撃性得点の平均値

ラグビーにおける攻撃性		高校(n=145)	大学(n=221)	t値
I 怒りに伴う報復行動	M	23.48	24.28	2.37*
	SD	4.06	4.47	
II 攻撃的なプレイスタイル	M	16.64	16.11	1.50
	SD	4.74	5.07	
III 接触プレイに対する恐怖	M	13.06	12.19	2.37*
	SD	3.31	3.45	
IV ルール違反の許容	M	17.90	17.92	.06
	SD	4.19	4.57	
V 相手の危害への配慮	M	9.50	8.26	5.23***
	SD	2.19	2.24	
VI 意図的な不当プレイ	M	17.75	18.64	2.30*
	SD	3.48	3.72	

\*\*\*p<.001, \*p<.05

けて行った。

## 結果と考察

### 1) 剣道における攻撃性の因子構造

研究1と同様の方法で、剣道における攻撃性の質問紙に対して主因子解を求めた。因子数を5としてバリマックス回転を行った時に最も明確な因子構造が生じた。Table 3は回転後の因子負荷行列を示す。これらの5因子の全分散に対する累積寄与率は、46.5%であった。因子負荷の有意性の基準は研究1と同じである。因子Iから因子Vは以下のように解釈した。

因子Iの項目には、自分のプレイのスタイルがどれほどラフで攻撃的であるか、周囲の他者にどれほど脅威を与えているかについての自己認知が含まれ、ラグビーにおける攻撃性の因子IIの内容にあたるものであった。そこでこの因子を「攻撃的なプレイスタイル」と解釈した。この因子を代表する項目は、18, 24, 26, 19, 14, 3, 1, 11であった。ただし、この因子には、ラグビーでの因子VIにあたる故意に不当な打突を加えるなどの意図的な不当プレイを表す、項目14や3も含まれていた。

因子IIの項目には、不正なプレイでも勝つためには必要であるなどの攻撃的な意見や信条が含まれ、ラグビーにおける攻撃性の因子IIIに相当する

ものであった。そこでこの因子を「ルール違反の許容」と解釈した。この因子を代表する項目は、8, 12, 21, 2で、そのうち21は反転項目であった。

因子IIIの項目には、相手の選手からの体当たりや打突に対する恐怖心や恐怖行動が含まれ、ラグビーにおける攻撃性の因子IIIに相当するものであった。そこでこの因子を「接触プレイに対する恐怖」と解釈した。この因子を代表する項目は、28, 23, 17, 10であった。

因子IVの項目には、自分や味方の選手に向けられた、相手の選手による不当なプレイに対する怒りや報復の意図が含まれ、ラグビーにおける攻撃性の因子Iにあたるものであった。そこでこの因子を「怒りに伴う報復行動」と解釈した。この因子を代表する項目は、13, 7, 25, 9, 4であった。ただし、ラグビーの因子が両極性の因子であるのに対して、剣道での因子は単一方向の因子であった。一方の抑制的な側面は、次の因子Vに含まれていた。

因子Vの項目の内容は、衝動的攻撃の抑制と、相手の危害に対する気遣いを示すものであった。これはラグビーにおける因子Iと、因子Vの内容にあたる。そこでこの因子を「争いごとの回避」と命名した。この因子を代表する項目は、6, 16, 5, 20, 15であった。

以上の結果から、研究1のラグビーにおける攻

Table 3 剣道における攻撃性質問紙の因子構造

No.	質問項目	因子	I	II	III	IV	V	h <sup>2</sup>
18.	私は激しい体当たりや諸手突きをして、相手選手を脅かす。		.73	.12	-.25	.14	-.07	.63
24.	私の激しい体当たりや打突は、味方の選手も恐れるほどである。		.68	-.03	-.20	.10	-.02	.51
26.	相手の選手がバランスを崩しているのを見て、ここぞとばかりに猛烈な体当たりや諸手突きをしかける。		.62	.09	-.19	.21	-.08	.48
19.	相手選手が怪我をしていたら、私はその箇所を狙う。		.54	.27	.19	-.13	-.18	.45
14.	私は試合中に相手がタイムをかけた直後でも、わざと激しい体当たりや打突をくわえる時がある。		.43	.35	.18	.10	-.23	.40
3.	私は試合中に相手が転倒した直後に、わざと打突部以外の箇所をおもいきり打つことがある。		.41	.37	.04	.15	-.20	.37
1.	まわりの人は私に、荒っぽいプレイを期待している。		.40	.28	-.16	.24	.03	.32
11.	私は普段はおとなしいが、試合上では人が変わったように激しい試合をする。		.40	.19	-.12	.19	.21	.29
8.	不正なプレイでも勝つためには必要なときがある。		.12	.66	.02	.10	-.07	.47
12.	審判が反則をとらなければ、ラフなプレイをしても良い。		.14	.66	.09	.16	-.00	.49
21.	勝つためにはいえ、相手をひどく怪我させるプレイをすべきではない。		-.18	-.61	.06	.08	.27	.49
2.	争いごとは剣道には付きものである。		.12	.53	-.11	.28	-.13	.40
28.	相手選手から強烈な体当たりや諸手突きを受けると、それ以後その選手をなるべく避けたい。		-.20	.05	.73	-.07	.19	.62
23.	私は引き技を打って、コーナーに追いつめられると、相手の痛烈な諸手突きが気になってしりごみしてしまうことがある。		.06	.03	.71	-.12	.05	.53
17.	私は自分より大きくて強そうな相手の選手が攻めてくると、つい弱気になってしまう。		-.12	-.05	.70	-.07	.08	.52
10.	私は相手から諸手突きを受けるのが恐ろしい。		-.20	-.01	.65	.11	-.05	.48
13.	味方の選手が相手からひどくやられるのを見ると、私はその選手のかたきをとってやりたくなる。		-.09	.24	-.13	.68	-.00	.55
7.	私は、試合中自分をかっとなりやすい人間だと思う。		.32	-.09	-.01	.60	-.21	.51
25.	相手が不当なプレイをしてきたら、私はすぐかっとなり手が出そうになる。		.32	.01	.10	.59	-.21	.50
9.	私は相手にやられたら、それ以上にしてやりかえさないと気が済まない。		.36	.34	-.07	.59	-.05	.60
4.	試合中、私はにくりしい相手選手を打ちのめしたくあることがある。		.09	.39	-.05	.54	-.11	.47
6.	試合中、私は相手とのトラブルをどんなことがあっても避けるようにしている。		-.21	-.07	.05	-.16	.69	.55
16.	試合中、けんかになるよりも私は他人の言うことをおとなしく聞く。		.07	.04	.27	-.35	.60	.56
5.	選手達は、お互い傷つけないと思っている。		.08	-.28	.03	-.01	.52	.36
22.	試合中、たとえ自分のほうが正しいと思っても、相手とやりあうようなことはしない。		-.14	.05	-.01	-.24	.51	.34
20.	試合中、私は相手選手にひどい反則を犯した時、非常にひどいことをしたと思う。		-.09	-.42	.22	.17	.47	.48
15.	相手の選手が私に腹をたてていたら、私は自分の側に間違いがなかったか反省してみる。		.12	-.30	.30	-.04	.44	.39
27.	試合中、私は相手に必要以上にダメージを与えないようにしている。		-.25	-.10	.26	.05	.34	.26
		寄与率	10.8	9.6	9.1	8.7	8.3	46.5

攻撃性の質問紙と研究2の剣道における攻撃性の質問紙は、質問項目の数とその内容において違いはあるが、両者の因子構造はかなり一致することが明らかとなった。このことは、集団と個人の競技形態や、ルールで規定される身体接触プレイの性質などがラグビーと剣道ではかなり異なるが、それぞれの選手は互いに類似した競技場面における攻撃性の因子を有することを示している。

2) 剣道における攻撃性得点の大学男子および女

子被験者間の比較

因子ごとに代表する項目の評定値を単純加算したものを、各因子の得点とした。Table 4は大学男子および女子選手の剣道における各攻撃性得点の平均値を示す。

両者の平均値を比較した結果、すべての因子の得点において統計的に有意な差がみいだされた。男子の選手が女子の選手より高い値を示した因子は、「攻撃的なプレイスタイル」、「ルール違反の

Table 4 大学男子および女子剣道選手の剣道における攻撃性得点の平均値

剣道における攻撃性		男子(n=309)	女子(n=260)	t 値
I 攻撃的なプレイスタイル	M	22.86	19.62	6.92***
	SD	5.91	5.24	
II ルール違反の許容	M	12.23	10.81	5.00***
	SD	3.57	3.21	
III 接触プレイに対する恐怖	M	10.59	11.52	2.91**
	SD	3.68	3.93	
IV 怒りに伴う報復行動	M	19.15	18.22	2.48*
	SD	4.73	4.21	
V 争いごとの回避	M	16.78	18.00	3.77***
	SD	3.89	3.76	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

許容」,「怒りに伴う報復行動」であった。いずれも攻撃行動の発現を促進する機能を有すると仮定される因子であった。反対に,女子の選手が男子の選手より高い値を示したものは,攻撃行動の発現を抑える機能を表す「争いごとの回避」,「接触プレイに対する恐怖」の因子であった。

### 研究 3

#### 方 法

日常の攻撃性測定の質問紙

日常における個人の攻撃性の測定には, Kornadt (1982)<sup>(6)</sup>の Saarbrücken Aggression Scale (日本語版; SAS 質問紙)を用いた (Table 5)。この質問紙は52項目からなり,それぞれについての回答は,「まったくあたっていない」から「まったくあたっている」までの6段階評定尺度上に評定するものである。SAS 質問紙は,動機論の立場から青年期における個人の攻撃性を測定するために開発されたもので,攻撃動機と攻撃抑制の2つの構成要素からなっている。

研究3では,この質問紙についてもその因子構造を明らかに,そこで抽出された因子と,競技場面における攻撃性の因子との関連性を検討する。

#### 調査の実施

研究3の被験者は,先の研究1と研究2の被験者と同じである。各々の被験者に対しては,その競技における攻撃性の質問紙と併せて, SAS 質問紙を実施した。

### 結果と考察

#### 1) 日常の攻撃性の因子構造

研究1と研究2の被験者のデータをプールした935名全体のデータについて,研究1と同様の方法で,日常の攻撃性の質問紙に対して主因子解を求めた。因子を5としてバリマックス回転を行った時に最も明確な因子構造が生じた。Table 5は回転後の因子負荷行列を示す。これら5因子の全分散に対する累積寄与率は,31.6%であった。因子負荷の有意性の基準は研究1と同じである。因子Iから因子Vの解釈に際しては, SAS 質問紙を大学生90名(男子47名,女子43名)を対象に実施し,因子構造の解析を行った Yamauchi (1990)<sup>(16)</sup>の結果を参照した。

まず因子Iの項目の内容については,怒りや攻撃行動を表出した後での後悔あるいは否定的な感情や,他者と争うことを避けてできるだけ話し合いや譲り合いを重要とする態度を表していた。Yamauchiは4因子を抽出しているが,その第1因子に有意な負荷を示した8項目は,すべて本研究のこの因子に有意な負荷を示した項目の中に含まれており(項目19, 24, 31, 17, 7, 40, 25, 16), 両因子は高い一致性を示した。そこでこの因子を「攻撃抑制」と解釈した。この因子を代表する項目は, 19, 16, 24, 33, 17, 7, 25, 31, 32, 52, 40, 3, 18であった。

因子IIの項目は,自分がいつも周囲から馬鹿にされているのではないかという他者に対しての一



Table 5 日常の攻撃性質問紙 (Saarbrücken Aggression Scale) の因子構造

No.	質問項目	因子	I	II	III	IV	V	h <sup>2</sup>
19.	私は何かまちがったことをすると、いつも良心の呵責に悩む。		.66	.02	-.08	.10	-.04	.45
16.	もし誰かが私におかしな態度を示したり、親切でなかったりすると、私は自分の脚にまちがいはなかったかと反省してみる。		.61	-.06	-.02	-.11	-.08	.39
24.	人の気持ちを傷つけないようにと、私は気をつけている。		.60	-.04	-.11	.06	.06	.38
33.	もし誰かが私を傷つけた時には、その人が本当に私を傷つけようと思ったかどうか考えてみる。		.59	-.03	.10	.03	.02	.36
17.	人々はたいへん互いに傷つけ合いたくないと願っているが、しかしもし万一傷つけ合うような事があると、それを後悔する。		.57	-.14	-.05	.17	-.06	.38
7.	もし争いにまき込まれるようなことがあると、私はそのために苦しんだり悩んだりする。		.56	.06	-.15	-.13	-.29	.44
25.	私は自分の意見を言う前に、もし私がこう言ったら、他の人はどう思うだろうかと考えてみる。		.55	.04	-.07	-.03	.01	.31
31.	他の人が困っていると思うと、私はその人のために解決策をさがしてあげる。		.53	-.11	-.29	.05	.17	.41
32.	悪には善で対処すべきだと思うから、私は実際でもそうする。		.53	-.07	.16	.09	.27	.39
52.	いさかいの際には、私は折り合い、そして調停しようとする。		.48	-.05	.05	-.01	.20	.28
40.	正しい理由があってもなくても、怒りを表現したあとは、何か悪いようなことをしたような気持ちになる。		.48	.08	-.27	.00	-.06	.31
3.	誰かが私を傷つけた時には、何故傷つけたのかというその理由を知る事が私には大切だ。		.46	-.02	.09	-.07	-.18	.26
18.	誰でも人に悪いことをすると、必ずその罰を受けると信じている。		.45	.05	.05	.09	.18	.25
6.	どんなことがあっても争いだけは避けるべきだ。		.37	.08	-.33	.03	.25	.32
23.	自分が正しいと思っても、状況によっては相手にゆずることが出来なくてはいけぬ。		.35	-.16	.02	-.17	-.00	.18
8.	腹が立っても、それを抑えることが出来ないような人は、世間では認められない。		.35	.05	.07	.03	.11	.14
35.	私はよく他の人たちから不当な待遇を受けていると思う。		-.02	.59	-.16	-.05	-.06	.38
34.	人々は用心と不信の念をもって近づくと良い。		-.05	.58	.07	-.02	.15	.37
36.	もし誰かが理悪く失敗すると、どこかに必ずそれを喜ぶ人がいる。		.01	.53	.14	.08	-.07	.31
22.	他の人たちは、私を怒らせるためにわざと私に反対しているのだという事を、私はちゃんと知っている。		.01	.51	.03	-.03	.17	.29
50.	うしろで誰かの笑い声が聞こえると、その人は私をバカにして笑っているのではないかと感じる。		.12	.50	-.16	-.15	-.20	.35
45.	私には腹の立つことがたくさんある。		-.04	.50	.20	.04	-.43	.48
51.	ほとんど毎日のように私は、人々が自分達の目的を果たすために、他の人を無視しているのを見る。		-.05	.49	-.04	.10	-.06	.26
26.	ある人々は人のじゃまをし、人を妨害するのを楽しみにしている。		-.01	.44	.04	.10	-.09	.21
29.	誰かが自分の意見をとおそうとしているのを見ると、私はたまらなく反対したくなる。		-.07	.43	.10	.01	-.05	.20
28.	人をあまり尊重しすぎると、自分たちの人生がおろそかになってしまう。		-.13	.41	.09	.12	.07	.21
41.	もし誰かが私に不当なことをした時には、私はそれ以後はその人を避ける。		.10	.40	-.14	-.06	-.21	.24
38.	友達との口論の際には、私はこう言ったらその子はああ言って、いつまでたってもきりが無い。		.04	.40	.24	.02	-.06	.22
9.	もし誰かが私に不当なことをしたら、そんなことをする人は、ひどい罰を受けるが良いと心の中で願う。		.08	.37	-.21	.09	-.13	.21
21.	私は言いわけをするための口実をすぐ見つけて、口実に苦勞したことがない。		-.12	.30	.09	.05	.09	.12
47.	自分の意見や願望を抑えて、人のそれを尊重する人は弱虫だ。		-.17	.29	.20	.05	.23	.21
37.	もし誰かが私に不当なことをすると、私はその人を問いただす。		.13	.14	.49	.08	.07	.29
20.	争いは友情につきものだ。		.12	.01	.48	.00	.03	.25
14.	けんかになるよりも、私は他の人の言うことをおとなしく聞く方が好きだ。		.35	.07	-.45	-.14	.33	.46
10.	人に攻撃されるよりも、人を攻撃する側にまわる方が良い。		-.34	.16	.43	.01	-.04	.33
1.	自分の権利は戦ってでも守らなないと、満足な人生は送れない。		.08	.11	.42	.16	-.09	.23
48.	私は怒りを何らかのかたちで表現したあとは、スカッとして気持ちよくなる。		-.21	.27	.40	-.12	.16	.32
30.	障害はそれに向かっていき、それと戦うためにある。		.31	-.08	.34	.15	.17	.27
49.	私をどことん怒らせて、なぐり合いのけんかにならないうつらひり込んだ人がいた。		-.08	.10	.34	.08	-.09	.15
12.	もし私が他の人に腹を立てている時は、その人達はそれを知るべきだ。		.02	.28	.29	.08	-.10	.18
15.	他の人がどう思うと、私は自分が正しいと信じたことをする。		.03	.06	.15	.70	-.03	.52
27.	私は人から言われなくても、自分のすることくらい自分で決める。		.08	-.04	.17	.70	-.01	.53
44.	私が一度こうしようと決心したら、人がいくら何を言おうとそうたやすく決心は変わらない。		.15	-.01	.21	.61	-.06	.44
5.	私は人からの援助を受けるのがきらいだ。		-.02	.18	-.11	.58	-.02	.38
4.	自分だけを頼りにしていると間違いはないし良い。		-.16	.30	-.06	.53	.07	.41
46.	私は人の言いなりにはならないし、人に利用されたりはしない。		.01	-.07	.39	.48	.03	.39
13.	時折、私の腹は煮えくり返る。		-.02	.22	.27	.10	-.52	.40
11.	もし誰かが私の行動を批判すると、私は非難されたような気持ちになる。		.33	.28	-.06	-.13	-.46	.42
2.	もし両親や友達から批判されると、私はその批判を快く受けつける。		.28	-.06	-.04	-.07	-.44	.28
39.	もし何かが私の思うようにならないと、私はすぐ腹を立てる。		-.08	.35	.30	.06	-.42	.40
42.	私はたやすく自分の意見や願望を抑えることができる。		.17	.10	-.33	-.07	.42	.33
43.	人生に多くを求める人は、実際にも多くを得る。		.06	.07	.17	.04	.34	.15
		寄与率	9.8	7.4	5.3	4.9	4.2	31.6

般化された不信感や自己防衛的な構えを表していた。Yamauchiの第3因子に有意な負荷を示した6項目のうち5つが、この因子に有意な負荷を示

した項目と一致した(項目36, 50, 22, 9, 41)。そこでこの因子を「自尊心に関わる攻撃」と解釈した。この因子を代表する項目は、35, 34, 36,

22, 50, 51, 26, 29, 28, 41, 38であった。

因子Ⅲの項目は、攻撃行動に対する肯定的な価値観や、攻撃的な行動計画と目標設定を表していた。そこでこの因子を「攻撃の意図」と解釈した。この因子を代表する項目は、37, 20, 14, 10, 1, 48で、そのうち14は反転項目であった。

因子Ⅳの項目は、強い個人的志向性を表す内容であった。そこでこの因子を「自己主張性」と解釈した。この因子を代表する項目は、15, 27, 44, 5, 4, 46であった。Yamauchiの第2因子が本研究では因子Ⅲと因子Ⅳの2つに分かれていた。

因子Ⅴの項目は、怒りの表出およびその対極の感情の統制を表していた。そこでこの因子を「怒りの表出」と解釈した。この因子を代表する項目は、13, 11, 2, 39, 42, 43で、そのうち反転項目は2, 42であった。Yamauchiの第4因子とは2つの項目が共通していた(項目39, 2)。

以上の結果から、ラグビーおよび剣道選手から得られた日常の攻撃性の因子構造は、先行研究との一致性が高く、ここで抽出された因子の妥当性はある程度保証されるものと考えられる。

2) 日常の攻撃性得点の各被験者群間の比較

因子ごとに代表する項目の評定値を単純加算したものを、各因子の得点とした。Table 6は各被験者群の日常における各攻撃性得点の平均値を示す。

被験者群間の平均値を比較した結果、すべての

因子の得点において統計的に有意な差がみられた。また研究1と研究2では競技場面における攻撃性の因子得点について被験者群間に有意な差があったことを考え合わせて、以下の競技場面と日常における攻撃性の関連性の検討にあたっては、各被験者群ごとに実施することにした。

3) 競技場面と日常における攻撃性の関連性

各被験者群ごとに基準変数としてそれぞれの競技における攻撃性の得点を取り、説明変数として5つの日常の攻撃性(SAS因子)の得点を取り、重回帰分析を実施した。Table 7は、ラグビーにおける攻撃性に対する日常の攻撃性の標準偏回帰係数( $\beta$ )と重相関係数を示し、またTable 8は剣道における攻撃性に対する日常の攻撃性のそれらのパラメータを示す。すべての重相関係数は統計的に有意であった。各説明変数の規定力の程度については重相関係数と標準偏回帰係数の大きさから解釈した。

まず、2つの競技で内容的に一致性の高かった「怒りに伴う報復行動」についてみる。SAS因子によりこの因子の29-19%が説明され、他の競技場面における因子に比べてもっとも強く日常の攻撃性と関連していた。個々のSAS因子との関連性をみると、「攻撃の意図」は4群で $\beta$ が有意、また「怒りの表出」はラグビーの大学を除く3群で $\beta$ が有意であった。日常一般での攻撃的な構えは、2つの競技における衝動的な行動傾向と正の

Table 6 各被験者群の日常の攻撃性得点の平均値

日常の攻撃性		ラグビー		剣道		F(df=3/931)
		高校	大学	男子	女子	
I 攻撃抑制	M	53.01 <sup>b</sup>	53.91 <sup>b</sup>	54.01 <sup>b</sup>	57.11 <sup>a</sup>	14.80 <sup>***</sup>
	SD	7.07	7.07	6.89	6.89	
II 自尊心に関わる攻撃	M	37.85 <sup>a</sup>	34.00 <sup>b</sup>	34.16 <sup>b</sup>	34.80 <sup>b</sup>	13.94 <sup>***</sup>
	SD	6.11	6.16	6.20	6.32	
III 攻撃の意図	M	22.71 <sup>a</sup>	22.58 <sup>a</sup>	22.71 <sup>a</sup>	21.91 <sup>b</sup>	3.00 <sup>*</sup>
	SD	3.27	3.63	3.40	3.65	
IV 自己主張性	M	22.61 <sup>ab</sup>	23.21 <sup>a</sup>	22.15 <sup>bc</sup>	21.68 <sup>c</sup>	6.49 <sup>**</sup>
	SD	4.06	3.80	3.75	4.24	
V 怒りの表出	M	18.13 <sup>c</sup>	19.16 <sup>a</sup>	18.41 <sup>bc</sup>	18.79 <sup>ab</sup>	3.93 <sup>**</sup>
	SD	2.77	3.11	3.23	3.35	

平均値の差はLSD法により分析した。共通した英文字を持たない平均値の間には $p < .05$ で有意差がある。

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 7 ラグビーにおける攻撃性に対する日常の攻撃性の標準偏回帰係数

ラグビーにおける攻撃性		日常の攻撃性					R (R <sup>2</sup> )
		I	II	III	IV	V	
I 怒りに伴う報復行動	High	-.24**	.07	.19*	.04	.31***	.46(.21)
	Univer.	-.08	-.06	.37***	-.04	.13	.46(.22)
V 相手の危害への配慮	High	.29***	-.00	-.07	-.04	.03	.29(.08)
	Univer.	.31	.04	-.03	-.09	-.11	.37(.14)
II 攻撃的なプレイスタイル	High	.11	-.03	.17*	.26**	.14	.39(.15)
	Univer.	.21**	.18**	.09	.11	.09	.34(.12)
VI 意図的な不当プレイ	High	.01	.00	.20*	.12	-.00	.25(.06)
	Univer.	.05	.02	.24**	.07	.05	.28(.08)
IV ルール違反の許容	High	-.32***	.10	.11	-.14	-.10	.37(.14)
	Univer.	-.22**	.14*	.22**	-.02	-.07	.36(.13)
III 接触プレイに対する恐怖	High	-.10	.19*	-.06	-.16	.21*	.35(.13)
	Univer.	.08	.15*	-.05	-.15*	-.06	.25(.06)

日常の攻撃性の因子は I : 攻撃抑制, II : 自尊心に関わる攻撃, III : 攻撃の意図, IV : 自己主張性, V : 怒りの表出。

\*\*\*p < .001, \*\*p < .01, \*p < .05

Table 8 剣道における攻撃性に対する日常の攻撃性の標準偏回帰係数

剣道における攻撃性		日常の攻撃性					R (R <sup>2</sup> )
		I	II	III	IV	V	
IV 怒りに伴う報復行動	Male	.00	.06	.36***	.02	.21***	.50(.25)
	Female	.07	-.03	.34***	.07	.17**	.44(.19)
V 争いごとの回避	Male	.27***	.11	-.21***	-.02	-.08	.38(.14)
	Female	.23***	.15*	-.24***	.05	-.15*	.42(.17)
I 攻撃的なプレイスタイル	Male	-.12*	.16**	.22***	.09	-.05	.38(.14)
	Female	.04	.11	.34***	.04	-.14	.36(.13)
II ルール違反の許容	Male	-.14*	.19**	.19**	.01	-.03	.35(.12)
	Female	-.04	.19**	.29***	-.03	-.02	.39(.12)
III 接触プレイに対する恐怖	Male	.04	.24***	-.16*	-.26***	.03	.36(.13)
	Female	-.02	.20***	-.09	-.26***	.11	.36(.13)

日常の攻撃性の因子は I : 攻撃抑制, II : 自尊心に関わる攻撃, III : 攻撃の意図, IV : 自己主張性, V : 怒りの表出。

\*\*\*p < .001, \*\*p < .01, \*p < .05

関連を示した。なお、ラグビーの高校のみが「攻撃抑制」と弱い有意な負のβ (-.24) を示し、高校においては日常での攻撃を抑制しようとする傾向が競技中においても機能していた。この関連

性の低下が、競技経験に伴うものか、あるいは競技レベルの上昇によるものかについては今後さらに検討する必要がある。

つぎにラグビーの「相手の危害への配慮」と剣

道の「争いごとの回避」についてみる。後者は相手に与える危害に対する配慮と同時に、衝動的な攻撃行動の抑制の要素を含んでいる。これらの因子に対するSAS因子の説明率は17-8%であった。個々のSAS因子との関連性をみると、両因子はともに4群で日常の攻撃性の「攻撃抑制」と有意な正の $\beta$ を示した。日常での攻撃をなるべく回避しようとする態度が強いほど、この因子の示す反応傾向も強いようである。また、剣道の因子についてはさらに「攻撃の意図」と有意な負の $\beta$ がみられた。これは剣道の因子に衝動的な攻撃行動に対する抑制の要素が含まれていたためであると考えられる。

続いてラグビーの「攻撃的なプレイスタイル」および「意図的な不当プレイ」と剣道の「攻撃的なプレイスタイル」についてみる。後者は前者2つの内容を含んでいる。これらの因子に対するSAS因子の説明率は「攻撃的なプレイスタイル」では15-12%であったが、「意図的な不当プレイ」では、8%、6%と低かった。個々のSAS因子との関連性をみると、これら3因子はすべて日常の「攻撃の意図」との正の関連性を示した。しかし、「攻撃的なプレイスタイル」で他の説明変数の $\beta$ の大きさのパターンは4群によりかなり異なっていた。

つぎに「ルール違反の許容」についてみる。この因子に対するSAS因子の説明率は14-12%であった。個々のSAS因子との関連性をみると、ラグビーと剣道の $\beta$ の大きさのパターンはかなり類似していた。この因子は「攻撃の意図」と「自尊心に関わる攻撃」には正の関連性を、「攻撃抑制」とは負の関連性を示した。

最後に「接触プレイに対する恐怖」についてみる。この因子に対するSAS因子の説明率は13-6%であった。個々のSAS因子との関連性をみると、ラグビーと剣道とも同じような $\beta$ の大きさのパターンを示した。この因子は「自尊心に関わる攻撃」とは正の関連性を、「自己主張性」とは負の関連性を示した。この因子は他の競技における因子とはやや異なった関連パターンを有していた。

以上の結果から、ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性はともに、SAS因子の日常の攻撃性と同じような関連性が存在することが明らかとなった。特に、怒りに伴う報復行動はSAS因子によりその29-19%が説明され、他の競

技場面における因子に比べてもっとも強く日常の攻撃性と関連していた。しかしSAS因子による競技場面における攻撃性の説明率が総じて低いことから、競技場面における攻撃性の程度には選手個人の発達差や性差などのその他の要因が影響することが示唆された。今後、これらの要因の効果を検討するためには、体系的に計画された研究が必要とされるであろう。

## まとめ

本論文の目的は、ラグビーおよび剣道選手の競技の場面における攻撃性の因子構造を明確にし、種目間での因子構造の一致性およびそれらの因子と選手の日常の攻撃性との関連性を検討することである。

研究1：予備調査の結果を受けて、ラグビー選手の競技場面における攻撃性を測定する40項目からなる質問紙が作成された。本調査ではこの質問紙を145名の高校および221名の大学のラグビー選手に実施し、次の結果が得られた。因子分析の結果、7因子が抽出されたが、6因子が解釈可能であった。6因子は以下のように解釈した。1) 怒りに伴う報復行動、2) 攻撃的プレイスタイル、3) 接触プレイに対する恐怖、4) ルール違反の許容、5) 相手の危害への配慮、6) 意図的な不当プレイ。

研究2：剣道選手の競技における攻撃性を測定する28項目からなる質問紙が作成された。309名の大学男子および260名の大学女子の剣道選手にそれを実施した。因子分析の結果、5因子が抽出された。これらの因子は以下のように解釈された。1) 攻撃的プレイスタイル、2) ルール違反の許容、3) 接触プレイに対する恐怖、4) 怒りに伴う報復行動、5) 争いごとの回避。研究1と2の結果、ラグビーと剣道のそれぞれの選手は互いに類似した競技場面における攻撃性の因子を有することが示された。

研究3：選手の競技の場面における攻撃性と日常の攻撃性との関連性を明らかにするために、研究1と2の被験者に対してSaarbrücken Aggression Scale (SAS質問紙)が実施された。因子分析の結果、5因子が抽出された。これらの因子は以下のように解釈された。1) 攻撃抑制、2) 自尊心に関連した攻撃、3) 攻撃の意図、4) 自己主張性、5) 怒りの表出。重回帰分析の結果から、

ラグビーおよび剣道選手の競技場面における攻撃性はともに、SAS因子の日常の攻撃性と類似した関連性のあることが明らかとなった。特に、怒りに伴う報復行動の29-19%がSAS因子により説明され、他の競技場面における因子に比べてもっとも強く日常の攻撃性と関連すること、また競技場面における攻撃性に影響するその他の多くの要因が存在することが示された。

#### 引用・参考文献

- 1) Bandura A (1973): *Aggression: A social learning analysis*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- 2) Bredemeier BJ (1983): *Athletic aggression: A moral concern*. (Ed.) Goldstein JH (In) *Sports Violence*. Springer-Verlag, New York, pp.47-81.
- 3) Bredemeier BJ (1985 a): *Moral reasoning and the perceived legitimacy of intentionally injurious sport acts*. *Journal of Sport Psychology*, 7 : 110-124.
- 4) Bredemeier BJ (1985 b): *Values and violence in sports today*, *Psychology Today*. October, 23-32.
- 5) Berkowitz L (1965): *The concept of aggressive drive: Some additional considerations*. (Ed.) Berkowitz W (In) *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2. Academic Press, New York, pp.301-329.
- 6) Kornadt HJ (1982): *Aggressionsmotiv und Aggressionshemmung*. Bern : Hans Hunber.
- 7) Kornadt HJ (1984 a): *Motivation theory of aggression and its relation to social psychological approaches*. (Ed.) Mummendey A (In) *Social psychology of aggression*. Springer-Verlag, Berlin Heideberg, pp.21-31,
- 8) Kornadt HJ (1984 b): *Development of aggressiveness: A motivation perspective*. (Ed.) Kaplan M, et al. (In) *Aggression in children and youth*. Martinus Nijhoff Publishers, Hague, pp.73-87.
- 9) Lefebvre LM, Leith LL & Bredemeier B (1980): *Modes for aggression assessment and control: A sportpsychological examination*. *International Journal of Sport Psychology*, 11 : 11-12.
- 10) Russell GW (1983): *Psychological issues in sports aggression*. (Ed.) Goldstein JH (In) *Sports Violence*. Springer-Verlag, New York, pp.157-181.
- 11) Ryan MK, Williams JM & Wimer B (1990): *Athletic aggression: Perceived legitimacy and behavioral intentions in girls' high school basketball*. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 12 : 48-55.
- 12) Silva JM (1981): *Normative compliance and rule violating behavior in sport*. *International Journal of Sport Psychology*, 12 : 10-18.
- 13) Siva JM (1983): *The perceived legitimacy of rule violating behavior in sport*. *Journal of Sport Psychology*, 5 : 438-448.
- 14) Silva, JM (1984): *Factors related to the acquisition and exhibition of aggressive sport behavior*. (Ed.) Silva JM, et al. *Psychological foundation of sport*. Human Kinetics Publishers, Champaign, LL, pp.261-273.
- 15) Smith MD (1978): *Hockey violence: Interring some myths*. (Ed.) Staub WF (In) *Sport psychology: An analysis of athlete behavior*. Movement Publications, New York, pp.141-146.
- 16) Yamauchi H (1990): *Child rearing and aggression in Japanese adolescents. Aggressiveness and its developmental conditions in five cultures (Symposia)*, the 10th IACCP Congress, Nara, Japan.